印度學佛教學研究第37卷第2號　平成元年3月

『スッタニパータ』における saññā の意義

羽　矢　辰　夫

はじめに

saññā とはいうまでもなく，想と訳され[1]，五蘊のひとつに数えられているものである。その想蘊とは，基本的には色想，声想，香想，味想，触想，法想の六想と考えられている。

ある説明では，「尼柯耶・阿含の説によれば，想とは根と境と識との三者が接触した場合に，その境を心像として心中に映ぜしめる作用でもあり，また心中に現われた心像でもあるのである。心には必ず何等かの対象があり，この対象が心像即ち想であり，また心が起る時には心像を心に映ぜしめる作用があり，この取像作用が想であるから，一切の心には想が存することになる[2]」とあり，またアビダルマにおいても，「想とは知覚・表象に現われたままの心像であって，いまだ思惟判断の作用によって付加修正の加わらないものである[3]」，「六所縁における相をそのままに取ること[4]」とされている。

五蘊説においては，色，受，想，行，識として，無常，苦，無我との関連でよく説かれる。おおくの場合，知覚あるいは表象と解釈されて，心のはたらきの一部分を分担させられているのは，上記の説明にもみられるとおりである。

はたして saññā とは，単に数ある心作用のひとつでしかないのか，それともっと違った意義をもっているのか。このことが本稿の中心テーマである。

筆者としては，五蘊説そのものについても問題があると感じており，五蘊をもってわれわれの個体存在あるいは一切の存在を表わすといった解釈だけですましてよいものだろうかと，疑問をもっている。

そこで，saññā をひとつのてがかりにして，また，ある程度教義化される以前の文献（たとえば，ここで用いる『スッタニパータ』など）にもとづいて，何か糸口が得られれば，とも思う。

なお，問題の性格上，想あるいは表象などの既成のイメージに惑わされないように，以下ではとりあえず，あえて原語のままで表記しておく。

1　saññā の意味

まず『スッタニパータ』において，saññā がどのような意味で用いられている

かをみてみよう。

(886) 種々に異なる，さまざまな真理などはない
世の中で，saññā によって，〔それぞれ〕永遠なる〔真理〕と〔考えられている〕だけなのである（つまり真理ではない）
〔saññā によっておこされた〕もろもろの偏見のなかで（diṭṭhīsu）思索をこらし
〔これは〕真理である，〔これは〕虚妄である，と二つのダンマを説くのである

(847) saññā を離れた人には，もろもろの束縛はない
paññā（智慧）によって解脱した人には，もろもろの迷妄はない
saññā と，〔saññā によっておこされた〕偏見（diṭṭhi）に執着する人々は
ぶつかりあいながら，世の中をわたっていく

(792) みずから誓戒を保つ〔と考えている〕人は
saññā に執らわれて，あちらこちらと〔ゆれ〕動き，〔おちつくことがない〕
paññā（智慧）豊かな智者は，ヴェーダによってダンマを理解し，
あちらこちらと〔ゆれ〕動かず，〔おちついている〕

(802) かれには，この世で見たもの，聞いたもの，考えたものにおいて
分別された（pakappita）saññā は，わずかでさえもない
〔saññā によっておこされた〕偏見（diṭṭhi）を執ることのないバラモンを
この世で，いかにして分別させようか

文脈から分離させてしまっているので，意味がわかりづらいかもしれないが，ここではそれほど抵抗なく，『スッタニパータ』にあらわれる saññā は，対象のありのままの像を心に映しだしたりする作用などではなく，すでに十分に色づけられ条件づけられたままに対象を把える基盤になるものとして考えられている，といってよいのではないだろうか。

もともと単なる心作用のひとつとして考えられていたのではないのである。

それどころか，きわめて重要な局面で用いられている，と筆者は考える。それは，『スッパニータ』ひいては最初期の仏教において，目標ないしは究極とみなされた人格と，そうでない人格とをわける，ひとつのキーワードになるような意義をもっていると思われるのである。

saññā によって考える者とそうでない者，saññā に執着する者とそうでない者，saññā を離れない者とそうでない者，saññā をもつ者とそうでない者との決定的な差異を考えるのである。

ここでは saññā は好ましくないものとして否定されている。そればかりか，好ましくないものすべての基盤に saññā があるとみなされている。また，saññā

によっては真理をつかむことはできないといっている。すなわち，saññā によっては，偏見つまり相対的な根拠にしかいたることはできないのである。そのことを理解できない普通の人々はそれでも，それらに執着して思索をかさね，考究をつづける。その結果，けっして論争のやむことはないといわれる。それぞれがそれぞれの saññā による根拠にもとづいているかぎりは，やむをえないことであろう。

それではどうすればよいのか。まず考えられることは，それぞれが根拠とするものをもたなければよいではないかということである。偏見をもたなければよいのである。そのためには，その起源となる saññā を離れる必要がある。いいかえれば，saññā を超えるのである。そのことがまた説かれている。

2　saññā の超越

（779）saññā を〔相対的なものであると〕よく知って，激流を渡るべきである
聖者は，もろもろの所有物に汚されない
矢を抜き，怠ることなく行ない
この世とあの世を望まない
（1113）物質的な形態を saññā することがなく
身体というものをすべて捨て
内と外において，何も実在しない，と見る人の知をたずねます
（1072）ウパシーバよ，あらゆる欲望の対象について愛着をなくし
無所有（ākiñcaññа）にもとづいて，ほかは捨て
最高とみなされる，saññā からの解脱（saññāvimokkha）ということにおいて解脱している人は
どこにも行くことなく，そこにとどまっている
（874）常識的な saññā を行なうのでもなく，非常識的な saññā を行なうのでもなく
saññā がないのでもなく，saññā をほろぼしたのでもない
このような境地に達した人にとって，物質的な形態はなくなる
分割された〔妄想としての〕現象界は，saññā を条件としているからである

これらがどうして saññā の超越ということになるのか，といぶかる向きもあろうかと思うが，そうすべく努力している修行僧たちの姿勢は，多少とも感じとれるのではないだろうか。

相対的な根拠の基盤でしかないといわれる saññā は，いうならばわれわれが日常的に行なっている分極化した思考形式を指しているのではなかろうか。ここではその思考形式を超えるべく行なわれる禅定のある特定の段階が説かれている。

まず，そのうちの無所有処定が説かれる(1113)。註釈によってそのように解釈するのであるが，「内と外において，何も実在しない」という境地にしても，何もないから saññā から解脱しているかといえば，そうではないであろう。それ自体の saññā はあるわけである。それは明らかに，saññā にもとづいたものであり，saññā に依存しているものである。

おそらく，ここではそのようなことに気がついていないのであろう。

また，(874) は非想非々想処定の起源ともいわれるものであり，無所有処定において，「何も実在しない」とする saññā は存在することに気がついて，さらに徹底して，あらゆる saññā の可能性をも排除しようとしている。それでもやはり，それ自体の saññā はどうしてもあるのである。

したがって，結局は滅尽定ないし想受滅 (saññāvedayitanirodha) と呼ばれる究極の境地を設定しなければならなくなる。

これら一連の流れは，saññā が好ましくないものであり，それが障害となって真理にいたれないとされている以上，当然の成りゆきであろう。

しかし，想受滅を究極とする構造に疑問はないだろうか。はたして，それで saññā を超えたことになるのだろうか。もちろん，筆者としても，これらの禅定の境地そのものは否定しない。しかし，それぞれの境地が目標となり，また低次から高次へと進展するのであれば，次の段階に相当するものは前の段階で saññā の領域に入ってくるのではないだろうか。究極の境地にしても，それ自体をあらかじめ saññā するであろう。

このような構造から考えて，筆者は最後のところで，saññā を超えようとするこれら一連の方法に疑問をもたざるをえないのである。もともと saññā に固く結びついているものが，はたしてその束縛から自由になれるのであろうか。もっとも，究極のところで何らかの飛躍があったり，これらすべてがその飛躍のための準備段階にすぎないというのであれば，話は別である。〔当然そうあってしかるべきである。〕なお，この問題はきわめて根本的かつ重要であるので，さらなる検討が必要とされるであろう。

結び

さて，saññā を原語のままで表記してきたが，はたしてどのように理解したらよいのであろうか。〔すでに見えかくれしているが。〕

saññā が否定されていること，さらにそれを超えるべく努力がなされていること，などを考えあわせれば，単に心のはたらきのひとつの要素だけに限定するこ

とには賛成できない。

（874）には，分割された〔妄想としての〕現象界は saññā を条件とする，と説かれている。筆者は，現象界とは saññā によって把握された現実であると考える。しかし，それは妄想としての現実とされる。saññā とは，この現象界を分割された現実として把握するしかたのひとつなのである。もちろん，この解釈は最も広い意味においてである。それはわれわれが普通に育てられれば，おのずとそのようになるはずのものである。しかし saññā によっては真理にはいたれない。修行者も含めて普通の人々は，それを超えるべく努力しても容易なことではない。なおかつ真理にいたれるかどうかの保証もない。

saññā とはそのようなものではないだろうか。五蘊説における意義とは，まったく異なるものである。

最後に，それでは saññā と異なって否定されない現実の把握のしかたがあるのか，という問題が残る。筆者はそのレヴェルにおける現実こそがここで真理と呼ばれているものであると考えるのであるが，それにいたるためのキーとして，paññā（智慧）を想定している。『スッタニパータ』においても，saññā と対比的に扱われており，無条件に肯定されている。しかし，それを具体的にどうして得るかということは説かれていない。ただ saññā は否定され，paññā は肯定されているだけなのである。

この paññā ということばの扱いには非常な注意を要する。現在のわれわれにとって，それは saññā の領域内にあるものでしかないからである。この場面では，saññā の領域外のものが要求されているのであり，それこそが，種々に異ならない唯一の真理をつかめるはずのものであろう。まったく別のレヴェルにあるという実感が必要なのだ。

ともあれ，ここでいわれている真理とは，われわれの日常的な思考形式の延長上にあって議論を重ねながら論理的につかめるといったレヴェルにはないことを（上下，優劣をいうのではない），よくよく銘記しておかねばならないであろう。

1）最近では「表象作用」「観念」「概念構想」「想い」などと訳される。

2）水野弘元『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』401ページ。

3）同上，402ページ。

4）同上，403ページ。

<キーワード>　saññā，スッタニパータ

（東方研究会専任研究員）